TASAKI × KMD「Cuddle-Fish」
ソフトロボティクスとジュエリーが生み出す、新たな空間体験

2026 年 11 月、日本発のラグジュアリージュエラーTASAKI と慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科（KMD）のコラボレーションにより、柔らかな浮遊ロボットがラグジュアリーの世界に登場しました。TASAKI の 2026 ホリデーキャンペーン「未知の世界へ。READY TO OPEN」の一環として、上海でのイベントをはじめ、日本国内のポップアップストアなどで、ロボットを活用した新たな空間演出に取り組んでいます。

今回活用されたのは、KMD の博士課程学生である徐 銘陽を中心に開発した柔らかな浮遊ロボット「Cuddle-Fish」です。本技術は、ヘリウムガスの浮力となめらかに羽ばたく翼を利用し、魚が水中を泳ぐようにゆったりと空間を移動します。従来のドローンとは異なり、柔らかな構造と生き物を思わせる動きを特徴とし、人とロボットの新たな身体的・感性的インタラクションの可能性を探求する研究から生まれました。

プロジェクトの出発点となったのは、TASAKI のクリエイティブチームによる従来のジュエリー展示の枠を超えた空間体験への挑戦です。真珠が育まれる海の世界をモチーフとする今回のキャンペーンでは、ロボットが単なる技術展示ではなく、ブランドの世界観を表現する存在となります。研究チームとクリエイティブチームは、ロボットの動きや空間との調和、実際の店舗環境での運用などについて検討しながら、技術と芸術表現を融合させた体験を形にしていきました。

研究室で開発された技術を実際の商業空間に導入することには、さまざまな挑戦が伴います。限られた空間での飛行、来場者との距離感、店舗スタッフの業務との調和など、研究室や展示会とは異なる条件に対応する必要があります。一方、こうした実環境での展開は、ロボットが人々の感情や行動、空間の雰囲気にどのような影響を与えるのかを考える、新たな研究の機会にもなります。

今回のコラボレーションは、大学での研究が産業界との共創を通じて新しい表現や体験へと発展する可能性を示しています。技術の実装だけでなく、その技術をどのような場面で、どのような体験として社会に届けるか。TASAKI のクリエイティブな発想と KMD の研究が出会うことで、ロボティクスの新たな応用領域が広がりま

す。KMD では今後も、ロボティクスとデザインの融合を通じて、人とテクノロジーの新たな関係性を探求していきます。



